

オリーブの樹

第134号

2016年5月15日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 パレスチナ連帯を共に 重信房子
- P 4 春の歌 重信房子
- P 5 独居より 重信房子
- P18 四月の短歌日誌 重信房子
- P19 中東2016年——「サイクス・ピコ密約」から百年(下) 重信房子

重信房子さんを支える会

パレスチナ連帯を共に

ナクバとリッダ闘争の5月に

パレスチナのナクバから数えて68年目、リッダ闘争から44年目の5月を迎えています。そしてまた、今年はいくす・ピコ密約から100年目の5月でもあります。今も尚、パレスチナは、イスラエル政府による激しい暴圧の中、反占領パレスチナ解放の闘いが、様々に闘い進められています。リッダ闘争の時代、アラブ民衆の結束した支援共同の中で闘われてきた反占領の闘いは今日、より多くの困難に直面しています。そんな中、占領と弾圧の不条理に対して十代の少年少女たちが、射殺覚悟でイスラエル兵に立ち向かっています。命を賭して次々と決死する若者の「無謀さ」、そのやむにやまれぬ心情に、大人たちは同じ心情をこらえ、心に血の涙を流しながら若者たちの決起を押し止めています。

一方、完全武装したイスラエル兵は、無力な若者たちを意図的に射殺処刑しています。倒れた若者に止めを刺して、処刑した隠し撮り映像のイスラエル兵の野蛮な行為が公表され、国際社会は衝撃を受けています。しかし、この犯罪を犯罪として認めたのは、イスラエル国防相1人で、ネタニヤフ首相をはじめとして、この兵士行為を擁護し称えるありさまです。法的にも道徳的にも破産しているイスラエル政府の犯罪はとどまるどころか、パレスチナ側に責任転嫁し、弾圧を強め和平交渉を拒み、占領・入植を続けています。米国議員の中からも、米国の法（人権侵害や戦争犯罪を犯す外国軍隊への資金援助と訓練を禁じている「リーヒー法」と呼ばれる法）に反しているとして、イスラエル軍の人権侵害調査を国務省に要求するまでに至っています。

かつてファタハを除く解放勢力・人民の多くが「オスロ合意」に反対した理由——「オスロ合意」は、イスラエルの占領に正当性を与え、パレスチナ解放独立よりもパレスチナに分断をもちこむ——は、あれ以降現実と化し、しかも「オスロ合意」の履行すら、ネタニヤフ政権は拒否して今日に至っています。パレスチナはどれだけ騙され蹂躪されつづけるのか……。

“アラブ人とユダヤ教徒は、これまで数千年にもわたり、平和と調和のうちに共生してきました。今から百年ほど前、シオニズムが、このようなユダヤとアラブの断絶を作り出してしまった。しかるにシオニズムとは、ユダヤ教の完全な反対物なのだ。”（ユダヤ教ラビ イスロエル・ドヴィド・ウエイズ）

1916年5月、英・仏・ロシアの「サイクス・ピコ密約」は、パレスチナを「特別国際管理地域」としました。どの国もパレスチナを支配下におきたいために、妥協の産物としてそうなったのです。しかも英国は、それ以前に「マクマホン書簡」によって「パレスチナを含むアラブの統一と独立」をオスマントルコへの反乱の見返りとして、アラブ側に約束していたのです。

パレスチナの蹂躪は、「パレスチナにユダヤ国家を建設する」というシオニストの決定以降、陰謀策謀的に進められてきました。1914年、第一次大戦勃発を奇貨として英国内シオニスト中心に英政界を牛耳っていくからです。当時のアズキン内閣の閣僚の一人であったポーランドユダヤ移民の後裔のシオニスト ハーバート・サミュエルは、1915年に内閣に「スエズ運河東部の守りとして、英国がパレスチナを併合し、300~400万のユダヤ人の入植」を提案し、アズキン首相に拒否されます。これには、ロイド・ジョージが賛成します。そして、1916年12月には、アズキンに代わってロイド・ジョージが首相の座にうまくつくと、すぐにワイツマンやロスチャイルドら、英国シオニストと非公式協議に入ります。そして1917年11月に、ロスチャイルドにあてて「バルフォア宣言」を表明しました。さらにロイド・ジョージ内閣はサイクス・ピコ密約の「パレスチナの特別管理地域」を、英国植民地とするために仏と取り引きして、戦後処理の「サン・レモ会議」までに「パレスチナを英委任統治領」とすることに成功します。

一方、アラブに対しては、「サイクス・ピコ密約」が、レーニンやボルシェヴィキによって暴露されると、「それはトルコやボルシェヴィキのデマであり、また『バルフォア宣言』は、パレスチナを含むアラブ独立国家の下に人道的にユダヤ人の共同体を認めるにすぎない」とごまかし続けます。そして、サン・レモ秘密会議の内容が1920年5月に公表されてはじめて、アラブの独立も統一も一言の言及もなく無視され、その一

方で、シオニストと約した「バルフォア宣言」は、英国が義務を負うと表明されているのを世界は知るので、しかも初代のパレスチナ高等弁務官は、1920年~1925年までハーバート・サミュエルが任命されます。（その後彼は再び閣僚となり、ロイド・ジョージの後継として自由党首となる）英国の約束を信じて反オスマントルコ戦争にたちあがり闘ったアラブ軍は政府を宣言し、英仏植民地支配に抗して闘いに決起します。しかし、武器、飛行機による戦力の優位な英仏に、シリアで、イラクで、多くのアラブの指導者が虐殺されます。この1920年のサン・レモ会議によって始まった英仏によるアラブ支配は、「アラブのナクバの年」として歴史に刻まれています。

以来、英国はシオニストのためのパレスチナ支配を助けます。増長したシオニストは、英国がユダヤ移民制限を始めると、テロによって英国を脅迫しながら、パレスチナのユダヤ化を進めました。さらにナチのユダヤ人虐殺というヨーロッパに起こり、ヨーロッパに責任ある問題に対して、パレスチナ・アラブに犠牲を強いていきます。シオニストと利害を結んだ米政府の支援策によって、1947年パレスチナはユダヤ人に有利なパレスチナ分割決議を国連総会で採択しました。そして、1948年「イスラエル建国」の策動の内戦（ダーレット計画）にはじまり、パレスチナは再びナクバ（大破局）を迎えます。

シオニストは当初から、「パレスチナのアラブ人を追い出してユダヤ国家を建設する」目的を言を弄してごまかし、実際「イスラエル建国」を強行すると、物理的にも文化圧殺においても、パレスチナ民族浄化をくりかえし行いながら現在に至っています。当初からシオニスト国家は、米欧帝国主義の植民地支配として中東に登場し、その影を反共戦略の下で築いてきました。さらにシオニストは米欧内に「イスラエルロビー」を強固につくり、一部の政界人を牛耳ることで、イスラエルの無法を不問にする工作をくり返し行っています。

しかし国際法、国連決議、人権をふみにじるイスラエルの無法に対し、アラブ地域を超えて米欧市民の中からも、国際的に包囲する闘いは、ねばり強く続いています。BDS運動(Boycott Divestment sanction)は、EUや各国政府をも動かしてきました。また、パレスチナ自治政府は、米仲介にかわる新しい国際会議による和平交渉によって、オスロ合意の再設計を計ろうと政治外交的闘いに傾注しています。その努力は努力としてもアッバス議長らは外国に頼る闘いから抜けきれません。

パレスチナの若者たちの決起に示されるのは、第一に自治政府の政治的闘いが、イスラエルによって無力化されていること、第二にパレスチナの統一的な政府機能が崩壊したままにあることによって、一人一人が、自らの力で自己犠牲的に反撃を決意して闘わざるをえないと思いつめた姿です。

若者たちから突き付けられているのは、何よりも統一したパレスチナ・アラブ人民に依拠した反占領の闘いを作ること、そしてその上に多様な国際連帯、和平交渉の再編国際化をもって、パレスチナ問題を再び中東の中心問題に据えることで応えていく必要があります。諸々に噴出している中東の問題の根本的原因は、パレスチナ・アラブの地をシオニストイスラエルが占領することによって発生してきたからです。パレスチナ問題の解決抜きには、中東の安定はありえないからです。

日本は安倍政権になって以降、イスラエルとの準戦略的関係をもとめ、この5月には経済同友会は、初めて代表団をイスラエルに送り、情報通信技術分野での協業を約しています。これはイスラエルのパレスチナ弾圧を基本とする軍事技術と協業する危険な道に進むことに他なりません。戦争法と連動して資本は動きはじめています。

今、こうした現実を見据え、このナクバの5月、リッダ闘争を闘った戦友たちに想いを馳せながら、私は世界各地で闘っている人々と共にパレスチナ連帯に立ち続けたいと思います。再び連帯をこめて、イスラエル占領問題を問う闘いを！と願わずにはられません。

グローバル時代の共通の闘いのテーマであるシオニズムと闘い、その要をなすパレスチナ連帯を国際主義の復権として闘い抜くことを、このリッダ闘争の日に願わずにはられません。

2016年5月5日

重信 房子

重信 房子

柘かしらを採りに駆け行く冬の朝胸はずませる節分飾りに

梅の香と母の気配に目覚めれば真夜の獄窓粉雪の舞う

春節の残雪光る獄庭見つ内戦激しとニュースを聴きぬ

バレンタイン春雷のち陽が差せば塚の向こうの白梅咲き初はつむ

国際主義世界革命燃えに燃え祖国を発ちし四十五年目

戦士らが沐浴したる川の辺に菜の花いっぱいチグリスの支流

鉛筆の濃き筆圧に君の意志再会果たせず最後の便り

冬とうふ薔薇霜の白さ真紅まか一輪旧友の遺体の発見されし日

九条があつていいねと羨んだパレスチナの友去年逝つたらし



ちり

晩居より 2月10日~4月30日

4回目の癌手術の検査、中断、開腹手術、回復に明け暮れた3ヵ月でした。

重信 房子

2月10日 昨夜点呼後、「明日、大腸検査のためこの下剤を飲んでください」と言われました。いつもは、前日の夕食は摂らず、栄養ドリンクで腸を洗浄し易いようにするのですが、今回は下剤を飲みました。今日は、8時から11時過ぎの3時間で、3ℓの腸洗浄剤ムーベンを飲むようにとの主治医の指示。普通2ℓくらいでいいみたいですが、何度も手術していて、腸を通りにくいのか、きれいにならないので大量に飲みました。でもまだダメ。4ℓ目をもって看護師さん「飲めるだけ飲んでください」。何とか半分近く飲んで、やっと腸内がきれいになりました。

そのため、少し遅れて2時過ぎから内視鏡検査。粘膜の下に、もりあがった腫瘍が去年発見されていて、それが大きくなったか……と気にしていたら、新たに腫瘍発見です。前にS状結腸の腫瘍をとったあたり、腸のヒダの裏側に隠れていたもの。1センチ位の大きさです。「ヒダの裏側を見落としていて、数年経っているかもしれません」と主治医。ぜん動運動で動くため見失ったりしながら、そこに目印のクリップを2本打ち込みました。「今後どうするか検討しましょう。あとでレントゲンを撮るように」とのこと。去年発見された粘膜下の腫瘍は見えないので、山のようにもりあがって見えますが、去年から大きさは変わっていないでしょう、とのこと。他にはありませんでした。3時半ごろ終えて、レントゲン室へ。腹部撮影。金属製のクリップを腸に打ち込んだので、その位置を確認する為です。腫瘍が得意な体質は本当に……。2月の検査はまだ続きます。

Kさん、お便り感謝。「今年から自分史を書こうと決めました」とのこと。いいですね!「これがなかなか上手いきません」。サークル(自分史)があるので入った、とのこと。Kさんの率直な感性を書いたらいいですよ。「赤ペンの直しばかりで、71才ですが小学校1年の国語の授業のように大恥をかきました。その先生も、やはり鶴見先生によって成長させられました、と言っていられました」とあります。小説書くつもり、他人のように凝視して

とらえつつ記していったらうまくいくのでは? 詩集の時のように柔かい感性が、きっと良いものになっていくでしょう。

Tさん「太田昌国講演会」「日本の左翼はなぜ影響力を失ったか、21世紀における左翼の可能性を探る」のコメント、レジュメ資料など受け取りました。太田さんの問題意識は、一度朝日新聞で読んだことがあります。ブントだった人たちのコメントなど読んでみます。感謝!「戦旗」新年号、ありがとう!Rくんが送ってくれたのでしょうか。私のところには「解放」も届きます。いろんな問題意識、日本の社会的力に育てきれないことが、何とも言えず悔しいです。でも、そこから引き続いて挑戦し続けることこそ大事ですね。

2月15日 今日は、午後みぞれが窓の外に舞っています。昨日から咲き出した白梅が点々とみぞれのむこうに。昨日は、春嵐が春一番になったり、異変の兆しか……。

と思っていたら、点呼間際に主治医からの診察の呼び出し。2月10日の検査で発見された腫瘍(いびつな型で、1.5cmの大きさ。SM癌という)これまでの経験から、癌として内視鏡手術を行うとのこと。2012年6月25日8ミリのものも、2013年4月18日のものも10ミリ、悪性癌だったので、今回は15ミリと大きいので、慎重に手術したいとのこと。今回、癌が内視鏡でとり切れなければ、開腹手術をまた行うとのこと。医療条件(スタッフ、手術体制)から、今週木曜日の2月18日に行いたいとのこと。EMR手術では、腸出血、穿孔の危険は、1000人に5人の割合であり、命を落とすこともある、などの説明を受けました。普通の形のポリープでないため、粘膜の下に食塩水を入れ、浮き立たせて行う。また、リンパ節や血管に移りしてとり切れない場合もありうる、とのこと。水曜日から絶食、栄養ドリンクで、2月18日11時手術。その後一週間は絶食点滴体制とのこと、伝えられました。手術の承諾書に署名指印しました。ちよっと大きめで、とり切れない可能性、覚悟してい

オリーブの樹 第134号

ます。そうすると4度目の開腹手術ですが……。

デジカメ歌人、立春のお便り。菜の花に湖と空、母と幼い子らの姿がのびやかです。“閻魔堂の名持つ十王寺一遍上人が住まいたり踊りて浄土へ”春へと踊り出したい風景ですね。そちらは癌とも病とも無縁のよう、どうぞお元気で！

2月17日 今日、2月12日に続いてまた引越。EMR手術で、一週間点滴など医務に便利な房に移りました。また大掃除。でもいい運動。今日は演芸会で落語などあったのですが、内視鏡手術のための、今日から入念な腸洗浄で参加できませんでした。

午後耳鼻科診察。まず聴力検査を行ったうえで診察室へ。去年のデータから南朝の度合いは進んでいないとのこと。年齢のせいもあるでしょう。変化が急激にはなかったため、耳鼻科2年の診察は終了します。また変調があったら診察を、とのことでした。午後、夜と下剤をまた飲んでるところです。「救援」「ニューズウィーク」「人民新聞」など届いています。宮崎先生は体調よろしいでしょうか？先生も大腸癌を抱えておられました……。明日はEMS手術です。

2月25日 今朝目覚めれば雪景色です。寒く曇り空。午前中懲役の人たちが雪掻きをしてグラウンドの雪を除きました。

私の方は今日は胃の内視鏡検査。朝食は摂らず10時半から11時頃まで検査でした。スムーズなカメラ使用で、10分から15分で「胃の異常は認められませんね。」と主治医はチェックの上終了しました。短い時間でホッとしました。午後は眼科の検査。眼圧は14.5で正常とのこと。ここでは緑内障

の視野検査とかは不可ですが、問題ないでしょうと眼科医。あとはエコー検査位で2月のチェックは終わります。胃と大腸の内視鏡検査が終わるとホッとします。まあ大腸はホッとする内容の検査結果ではありませんでしたが……。

夕方「オリーブの樹」133号受け取りました。表題の歌“戦争と空漠の年ふりかえるイスラム国を生みしは誰ぞ”を選んで下さいました。蘭の花でしょうか？色彩があつたらきつともっと映えるのに！水仙の花も椿も梅も今きつと咲いている花を「オリーブの樹」にありがとう！竜子さんの庭に香子花が咲いていますか？私は水仙を飾りたい、葉の花を飾りたい！と思いますが叶いません。それでもまだピンクと黄色系のアリストロメリヤが豪華に私の前に咲いています！

今年から「オリーブの樹」年6回から年4回発行にしたので編集も取捨選択も大変だったでしょう。友人たちに伝えたいといつも日々思ったことを日誌にたくさん書くので、それに「書評」も、更に「2016年中東——サイクス・ピコ百年」まで、ありがとうございます。「ガサ入れ」で「現役ノ！」と「励まされた」3月、少しでも役立ちたいと書き出した中東関連の情勢誌への依頼にこたえた文章。一年になります。学習し直しつつ、構想しつつ書きはじめると案外「張り」もあって楽しいことでした。編集の皆さんありがとうございます。

2月28日 45年目の今日「決然と」という感じだったと思いますが、日本を出発しベイルートへ向かいました。26日にはすでに奥平さんも無事に発っていました。遠山さんも見送ってくれて……。若い当時の人々の命懸けの「大志」をととも貴いものとして友人たちを思い返しています。明日夕刊に「人生の贈り物・私の半生」が載っていますが、鳥越後太郎の9回目に「元日本赤軍岡本公三の単独インタビューが語られています。「テルアビブ事件から30年の02年、足立さんが連絡を付けてくれてレバノンの首都ベイルートの郊外のアパートで重信房子受刑者の長女メイさんの世話を受けてつましく生活していました。云々」と続くものです。でもメイは2001年帰国して日本に居たし、それまで岡本さんの世話をしていたことはなかったけど憶測で書いたのでしょうか？え！？と思いつつ読みました。

3月2日 もう三月。でも寒さ続きの八王子。午後

主治医診察。主治医の内科担当から私の手術のため外科に手配して下さいましたが、外科執刀医より癌の「確定診断」がなければ開腹手術はできないと言われたとのこと。そのため、また内視鏡で癌の生体を探る必要があると伝えられました。また生体検査をして癌細胞が見つければOKだが、見つからない場合でも、癌がある場合もあると言われました。私は「すでに癌はこれまで8か所大小摘出し、小さいポリープ5~8ミリの癌だったのです。18日にはこれまで2回開腹手術を執刀して下さいました医務部長の立ち会いも当然癌として手術を了解されたと思っていたのですが……？」と言いました。主治医ももちろんそのつもりで取敢て生体を探らなかったのですが、外科医には外科の考え方がそれぞれあるようです。それに若く初めての開腹手術と違って、私の場合は高齢な上にすでに3回の開腹手術で腸が癒着していて難しく、リスクが高いこと、そのためはつきりと癌細胞が確認された上で行いたいとの意向のようです。それで私は主治医に「執刀医にお願いして下さい。開腹摘出して癌でなかったとしてもそれは私の責任です。でもどうしても今度の執刀医が『確定診断』が必要なら内視鏡検査を受けますけど」と主治医に話しました。主治医は「今すぐ結論を出さなくても、重信さんの方で考えて結論を出して下さい。私も外科とはなしてみます」とおっしゃって、内視鏡検査の署名指印は次回に行うことにしました。遅れないうちに手術をしたいのですが、改めて自分の「リスク」を知らされた思いです。今日は暁暗の東空に下弦の月が見えるでしょうか。

3月4日 「クリスマスローズの季節になりました」と、Kさん。みごとな色鮮やかなクリスマスローズの数々のドライフラワーのお便り、感謝。自分史は進んでいますか？記憶力の悪さに苦労しているとのこと。当時の新聞や歌や文化を図書館で調べて通読すると、記憶が喚起されるかもしれません。記憶って自分の心に刻まれたことが、案外不正確だったりするのを、私も経験しています。楽しみながら書くのが“こづ”ですよ。

デジカメ歌人、雨水のお便り、おみくじを見て結びつける親子の写真。そんな光景はなんとも懐かし気です。“亡き父の電話に掛けた「お客様の都合によりお繋ぎできません。」”“雛梅の黄が匂う下下戸の父酔いて踊りてそと立ち去りぬ”父親っ子でしたか。気持ちが伝わる二首です。ここのマンサクは

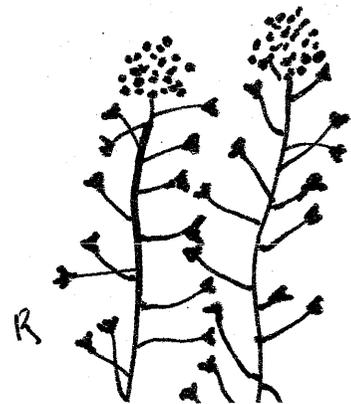
今頃咲くはずなのですが、もう去年根元から切られて、白い切株になってしまいました。これから花々の春ですね！

3月7日 久しぶりの雨。一雨ごとに春が近づくのでしょうか。14℃~10℃との予想気温で、スチームは入りません。体感はずっと低いのですが……。

午後主治医の診察。やはり外科は「確定診断」を要求しているとのこと。再び内視鏡手術で腫瘍をとるのはムリ。「確定診断で癌細胞が検出されなかったらどうなるのですか？その論理だと手術なしですよ？」私は手遅れを気にしていることを話しました。すでに内科医判断は癌と断定しているし……。その時はまた協議して今後を決めるとのこと。とにかく、3月10日(木)午後生体採取する内視鏡検査を行うことになりました。9日は栄養ドリンクと下剤、10日手術後は11日に栄養ドリンクとお粥です。今日は茶道にも参加しませんでした。

3月8日 「世界女性の日」そのせいか、女性差別撤廃条約の実施状況を審査する国連の女性差別撤廃委員会は7日、日本政府への勧告を含む「最終見解」を公表したとのこと。女性だけの再婚禁止期間の廃止や、選択的夫婦別姓の採用など、民法改正や慰安婦問題の日韓合意の不十分、「被害者中心のアプローチが十分とられていない」ことなどに遺憾表明など。指摘されるべきことが、再び指摘されているということですね。

今日は「パレスチナ最新情報」JSRです。こんな資料が欲しかったのです！パレスチナで何が起きているのか？パレスチナ問題に世界の国々がどう反応しているのかが、ニュース速報として短くまとめられています。かつての経験に照らしつつ読むと、リアルに情勢を実感できる気がします。何かとてもリアルに。今後とも、この資料を送って下さい。PFLPの動向も知りたいところです。自治政府の無力、PLOの再建改革こそ必要ですが、PFLPの考えはどうなのか……。パレスチナでは13才の少女が、イスラエル人をナイフで攻撃して射殺され、2月21日にはパレスチナの少女12才のディナちゃんが、イスラエルの裁判で4-5カ月の刑を言い渡され、最年少政治犯として話題とか。私は米国にかわって、新しい「国際会議開催」を去年か



オリオンの朝 第34号

ら主張。アッバスは、そこに活路を見出して重視していこうとしています。ハマスは、ネタニヤフ政府との外交的な交渉再開は無益、と主張しています。アッバスは、何よりも統一政府をつくった2014年6月の合意に基づいて、選挙による民主的なパレスチナ再建にこそ全力を注ぐべきでしょう。

3月10日 今朝は8時から腸内洗浄で30のムーベンという液体を飲んで昼頃までに準備はできました。13時半から14時半、手術室内で内視鏡による生体採取。腸の壁の裏側の腫瘍は1.5~2.0センチ。7カ所から生体を採りました。主治医(内科)がいつものようにやっていますが、医務部長と外科が加わって話をしながら採取していました。「出血があるために今日は経口のジュースなどは止めて点滴に」と内視鏡検査のあとに戻って診察室へ。そこでモニター画面で見ていた写真で7カ所の採取について説明されました。

その後すぐ点滴は中止し、OS-1の補助水のみとなりました。「安静に」とのこと、丁度作業の校正なのですが、体調もしんどくて夜は休むことにしました。

ベッドに横になりつつ今日の新聞一面の「高浜原発差し止め、大津地裁仮処分、稼働中初のきょう停止」の見出しを何か力強い嬉しさというか、かみしめています。この闘いに尽くした友人たちの顔が次々とうかびます。この判決こそ東北震災5年の日に遅すぎるとも、ふさわしい解答として刻まれるべき金字塔です。連帯!

3月11日 寒く寂しげな曇り空。今日は栄養ドリンクのみの日。さすがおとといから栄養ドリンク、昨日は点滴中止でOS-110カロリーのみで、今日も栄養ドリンクではお腹は空いているのに飲みきれません。テルミール毎食200mlの小さなパックながら400カロリーですが、濃く甘味。体調もまだ戻らずベッドに横になったり。

ちょうど校正したいものが届いたので、なんとしても週末には仕上げたいので点呼後は起きて作業。この3・11みんなはどんな風に過ごしているかしら……。あの3・11の日のこと、きっと友人たちもメイも思い返しているだろうな……とベッドの上で考えたり。黙禱の時間を放送で伝えられたので、窓から曇天を見上げて黙禱。梅の香がふわりと届きました。

3月16日 先程主治医診察。「確定診断が出ました。高分化腺癌です」とのこと。主治医はそして私も癌であることは当然だと思っていました。主治医も癌なのに生体で採取できないということが無いように、腫瘍の2センチからの7カ所をあちこち採取したので確定診断となりました。「あとは外科医の方に移ります。外科の方から今後のことは聞いて下さい」とのこと。CTの頭部、肺、腹など胆嚢を除いて異常なしと専門家の結論。胆嚢には胆石らしいものが写っています。「来週胆嚢のエコー検査をします」と主治医。診察を終えました。4月には(または3月?) 外科手術です。

新聞では「ロシア軍シリア撤退」の記事。ロシア軍は負担も大きいし引き時をうかがっていました。12日にムアレム外相が「アサド大統領の地位について議論はしない」など発言したことは大きな転機です。多分これはシリアからロシアに向けた水面下のやりとりの反映でしょう。ロシアとしてはバース党体制を固め、アサドに代わる人材で形式は譲りつつも実質で乗り切ってほしいと考えていたでしょう。また一端退陣させて選挙で復活という説得もしたかもしれませんが。「アラブポリティックス」では権威主義政権は引けないのですが、もっと上手くやったらいいのに……と、ムアレム発言が気になっていました。プーチンは「ソヴィエト政権」と違ってシリアに輪をかけて権威主義政権ですから。アサド政権が「主体性」で乗り切れるか見物です。

レバノンではシリア軍の長期滞在時の治安部隊の横暴で嫌われていたし、パレスチナ解放勢力や組織でもメンバーがシリアに何らかの理由で拘束されない組織はなかったし、私たち含む組織でも一度は必ず拘束されたものです。「反帝」の友軍ではあるけれど批判には事欠かなかったシリア政府。

アラブ人は政治批判を「小話」にして笑うのですが、子どもたちが学校から仕入れてくる小話に私たちも大笑いしたものです。たとえば『アサド大統領99%で信任再選』。トルコのウザールも選ばれなくてシリアのハーフェズ・アルアサドに協力を頼みました。『OK』とムハバート(秘密警察)を派遣してくれました。これでバッチリ、ウザールの勝利。ジャー、投票箱を開けました。あ! 99%全部アサド、アサドと書いてあります! こんな風に。大局観に立っていったん引く方法は考えてもいいけど、構造的に難しいバッチャールです。さて……?

3月17日 今日から外科の準備に入りました。朝、採血。10時から3つの検査。心電図と血液凝固具合チェックで、耳たぶから採血。それに呼吸器の検査。年令と身長体重から2,200以上の数値ならOKのところ、3,000を超えているので肺活量は大丈夫でした。

その後、久しぶりのグラウンド運動に参加。建物を出ると、今日の陽気でタンポポが咲き、ねげし、カタバミ、大イヌフグリ、ナズナが咲く道です。いつも毎年咲くはずの坂道で、ふきのとう一つ、つくしも何本も見つけました。でも行進中に横目で見ただけですが、嬉しくなりました。ウォーキングしているだけで身体が汗ばみます。もう春ですね。でも、房に戻ると分厚いコンクリートのせいかな寒い……。

午後はレントゲン撮影。また、呼吸器をきたえる「吸引ピンポン玉遊び」のようなトリフロという器材も届いて、暇をみてはトレーニング開始。これをやると、もうすぐ手術と実感します。

今日受け取った「救援」に、「オリオンの会」の岡本公三さんの現状と支援要請が載っています。支えきれずのまま心苦しい思いで連帯しています。

3月18日 「山中レポート」が届いて、2月の土曜会の様子がありました。福島支援の報告や、ソウル宣言の会・のりこえねっと・TPPに反対する活動が、国際的に連帯しているのですね。「TPPに反対する運動、僕らはどうしても自分の生活を脅かされる、みたいに捉えるけれど、ニュージーランド・マオリ族の女性は、主権の問題として捉えている。沖縄と一緒で、自らの決定権の問題」などの報告は、なるほど……という感じです。今、土曜会のメインは、「今に続く砂川闘争」ということで加藤克子さん(60年安保を樺美智子さんたちと闘い、一貫して立川で三里塚・砂川・多摩地区の反戦平和運動を担ってこられた)の講演と、土屋源太郎さんの「沖縄・宜野湾市長選応援報告」各現場、実情を適確にとらえておられます。キャンプシユワブの座り込みにも参加して、沖縄の熱気のすごさを実感しています。また、読谷村長さんや名護の市議会議員の方々が、砂川闘争について話を聞く機会を作ってほしいとのこと話をしたことなど、とても良い交流が実現されたとの報告です。

読みながら、その後の3月8日、砂川闘争再審請求が棄却されてしまったこと、憤りと共に思い返しています。地裁判決は、田中最高裁長官が米国大使



館関係者と謀ったことを「審理の公平性を害するような内容とは考えられない」として棄却したのです。欧州や米国では、そんな判決は出ないでしょう。日本の司法は「先進国」の中でも、法や憲法よりも権力機構の防衛第一が続いています。「砂川・三里塚・沖縄、これは現代の農民一揆だね」と土屋さん。砂川裁判も「棄却されたら当然上告もします」と予告していました。何としても反撃したい闘いです。連帯!

土曜会は、選挙の話も盛んで熱気。昔の自治会室、現恩研室のようです。立川自衛隊監視テント村・井上さん、加藤さんのレジュメも同封されています。学習します。感謝。

3月23日 今日は外科初診察があるか……と心待ちしていたのに何もありませんでした。来週なのでしょう。早めに手術日を確認して、弁護士・家族親族・友人に伝えたいためです。今、校正途中、入力待ちの原稿も、手術前に一区切りして手術に臨みたいと思っていますところ。

ちょうど届いたパレスチナの日々のニュースを読んでいると、その不条理さに、バイルートやアラブにいた時よりも、もどかしい。ガザ地区では、今年2月までの自殺と自殺未遂者は80人も。以前の3年間の毎月平均25人~30人をはるかに超えるとのこと。ガザは、2014年ネタニヤフ政権の破壊・虐殺から復旧しえずにいます。80%が貧困ライン以下の生存状況にあり、成人失業率は43%とのこと。

一方で、3月8日に発表されたイスラエルのユダヤ系の国民の世論調査によると、半数近い48%が「アラブはイスラエルから追放又は移住させるべきだ」と答えているとのこと。また、ユダヤ系国民の80%が「ユダヤは優遇に値する」と答えているようです。

ホーブの欄 第14号

犠牲者を踏みつけにして、抑圧・収奪者が「被害者」のように振る舞う世界各國の指導部の「イスラエル化」は、今、欧州でも「反テロ」の名で続いています。ベルギーでも大規模な無差別攻撃。戦略も知性もない憤激のような闘い。遠くのIS指導部は同胞を費消することもいとわないうま。 「シャルリとは誰か？ 人種差別と没落する西欧」(エマニュエル・トッド著)を、ちょうど読んでいたところで、欧州の現在が重なります。イスラム恐怖症(差別)が「自由」「平等」「友愛」を破壊すると。

3月24日 エコー検査を終えて、もう昼食という頃に姉の面会。体調悪く病院通いの姉の、予定外の面会に何事？ と気にかかりながら面会室へ。姉と義姉は今日呼ばれて、医師面談だったと知り、びっくり。手術は4月4日予定していると姉たちから聞いて憤慨。何で！？ 私に先に伝えてくれないのか？ 外科医とはまだ会えてもいないのに、手術日もわからず、手紙も出せずにいたのに……。ちゃんと一言もなくっちゃ！ と私がムツとしていて「みんな貴女のために最善を尽くして下さっているのに、そんなこと言える立場じゃない」と姉にたしなめられました。それはそうですけど……と「抗議や文句は言わないから大丈夫、心配しないで」と姉に話しましたが、もう30分の時間切れです。

夕方、夕食前に診察の呼び出し。外科医の初の診察でした。生体を探る内視鏡診察の時、医務部長となる人でした。家族面談と前後してしまいました。と挨拶されました。そして、今回の手術は難しい手術であることを、腹部レントゲンと、CT写真を示しながら説明してくれました。S状結腸に2cm位のポリープ状のものだが、癌であること、その位置が2009年に大阪で癌摘出したところと重なり、



そこにはすでに細い針金系の縫合があり、それを途中切断でなく、すべてふくめて切り取るように大20~25cm位は切除し、又隔清(リンパ)もする必要もある。次にCT写真の断層写真を示しながら、大腸がお腹の側ではなく、むしろ背中側にあるので、開腹してそこに迫り着くのが難しい点。最も危険なのは、すでに3回の開腹手術で人為的に操作した場所であり、他の臓器を傷つけないように、如何に行いうるかに成否がかかっているとおっしゃった。技術的にも、手間・時間もかかること、最悪事態も詳しく説明下さった。そして、4月4日を予定しているが、緊急な手術ではないので5月でもよい、とおっしゃった。「早いほうが良いですよ」と言うのと「うまくいけばそう言えるが、最悪となった場合、早いほうが最悪ですよ」ともおっしゃった。大腸手術は、人工肛門になることも多いことも。来週までに、もう一度質問などよく考えて決断しなさい、とのことでした。うーん、早くして人工肛門を早めるより遅らすべきか……。校正途中の原稿未着も気になっています。手術前にタイプ稿は届くか……。気になることばかり浮かびます。そうだ、エコー検査の部屋から癌がもう映っているのを見ました！

3月28日 窓の外、扉の外の花もずいぶん花が開きはじめています。ベランダのすき間から覗くと、敷地内の桜の木も何本か咲き始めています。それでもまだ寒さはカイロに助けられている八王子です。

午後、外科医診察。「先週に大切な点は話しましたが、質問や手術の決断など今日はまた話をします」とおっしゃった。私の方からはリスクはあまり自覚しきれいになかった点など、具体的に良く分かったこと、更に質問として人工肛門の可能性など知りたい点を話しました。大腸は長い人で1.5m程、人工肛門になる可能性は三つ。一つはたぐり寄せて(切除したあと)繋ぐことができない(長さ不足とか)。二つは上手くくっつかないこと。三つは縫合不全とのことでした。私はすでに40cmは切除しているので、やはり人工肛門の可能性が高いことを理解しました。「これからも癌になる可能性がある場合、人工肛門の後では内視鏡の検査は可能なのか」と尋ねると、これからも癌は再発するでしょうし、人工肛門でも内視鏡検査は可能であることなど話して下さい。開腹が初めてではなく4回目なのでその分リスクも高いことなども聞き、4月4日に手術することへの承諾書に署名押印しました。まず手術までに

腸がきれいになっていることが条件とのことで、水曜日から下剤など流動食に換えて、手術前日までに少なくとも内視鏡検査の洗浄された基準に達すること。それができないと危険なので手術は中止せざるを得ないそうです。蠕動運動が弱く大変な便秘症で普通2ℓのムーベン(腸洗浄薬)を3.5ℓ飲んでいるのは先生も知っておられて気にしています。それがOKになったらあとは開腹した上で様々な条件が上手くいくかどうか技術以外のことが成否を決めるそうだと分かりました。やはり大腸に他の臓器を傷つけないように、上手く縫合できるかです。先生の率直な話に安心して決断することにしました。

3月30日 「土地の日」。パレスチナの闘いの日です。そしてリッジ闘争の仲間一人であった檜森さんが満開の桜の下でパレスチナの闘いと怒りに連帯し自決した日でもあります。もう14年にもなるのですね。あの年のように日比谷公園はもう桜が満ちていることでしょう。

ちょうどパレスチナのニュース「J SR」が届き、イスラエルが西岸のエリコと死海近辺の234ヘクタールを接収したことを「ピースナウ」が3月15日に発表し批判したとのこと。西岸の土地を接収し植地の拡張や商業・娯楽施設などの拡大に使うことが計画されているとのこと。仏と独政府は「入植活動は国際法違反であり、二国家解決支持というイスラエルの約束に反するものだ」と批判。EUも「将来のパレスチナ国家の生存可能性を崩壊」と非難。日々の抑圧と強奪に憤怒にかられた若者たちの自発的な個人決起で射殺される事件が相次いでいて、いたたまれぬ想いはどのパレスチナの大人たちも同じでしょう。「土地の日」に改めて連帯！術のない自分に腹立たしいですが、資料からPFLPの様子もちょっとわかって分かってありがたいです。

今日は朝から大量腸洗浄ムーベン(ニフレック配合剤)を3ℓ飲みました。外科医診察では輸血の用意にサイン。午後から流動食、重湯、栄養ドリンク、野菜スープ、桃缶のペースト状のものです。お腹は空くのでおいしく食べています。

27日JAPACの「土地の日の集い」があったのです。資料感謝。そうですか若ちゃんの生誕80年祭連続上映「天使の恍惚」など今だに切迫感がありますとのこと。若ちゃんが居ないのは残念なことです。時々ふと何かの折に思い出しては「あ、もう居ないんだ……」と思うばかり。みんな生きていてほ

しい！ 10・8山崎博昭プロジェクトからの資料、ニュースレターも今日受け取りました。来年の成功を！

夕食の流動食は重湯、ポタージュ、りんごすりおろしと卵クリーム状、プリン、紅茶など。

窓の外の桜はあつという間にもう五分咲き。今日は彼岸の法要でしたが腸洗浄でとりやめました。でも桜に向かって檜森さんや西浦くんや信原さんらと語りました。合掌。良い日差しです。和尚が差し入れてくれた法華経を抱いて(読めないけど)心静かに花の季節に。

4月1日 窓の外に満開の桜が見えますが曇天。

午後看護婦さんからのオリエンテーション。これから4月4日の手術までの計画についての確認です。流動食は日曜4月3日朝まで。あとは絶食で、OSIの水分のみ可。今日から下剤を、明日あさつと飲み、4月4日朝から流腸(6時)で、9時半までに様々な準備を終えて、10時前に手術室着です。私も、古いメディカルレポートで、2012年PET検査の後の小腸癌摘出時の記録を読み返しながらか、手術後一週間位で、順調なら生活に支障なくなるの思い返しています。何とか4年前のような体力・気力で早く普通に帰りたと思っています。この2012年の記録でも小腸の癒着がひどかったとあり、「その奥の大腸が……」と、外科医の言葉を思い返しているところ。新聞では、4月9日以降に開催される予定のシリアの和平会議に向けて、ロシアの通信社が30日、アサド単独会見をしたとのこと。その中で、和平実現後の新憲法制定や政権移行のための選挙実施を担う暫定政権の構成に「独立勢力や反政府勢力・国家に忠実な勢力の代表が加わることは理にかなっている」と、反体制派の参加を受け入れると明言したことがニュースのようです。

米欧・サウジ・トルコが支持する主要反体制派でつくる「最高交渉委員会」は、あくまでもアサド退陣を主張しています。ニュースから、この間のシリア政府とロシア政府の「齟齬」を感じます。ロシアは機会を見て、負担となるシリア軍事介入の出口を探しており、当初から政治プロセス移行のイニシアチブを重視していました。バアス党政権との戦略的紐帯を維持し、バアス党政権を延命させる一つの方策として、「戦略的に一時的な」アサド退陣も選択肢の一つとして、ロシア側は考えていたかもしれません。

シリア側から見ると、歴史的なソ連時代からの友好は、ブーチンロシアまで変化が大きくはありえなかったもので、これまでのように考える傾向があるかもしれません。バアス党に対するロシアの考えは、かつてとは同じではないことは、対イスラエル戦略をみてもわかります。しかし、シリア側は、バアス党システムと国民のアサド信任から「戦略的退陣」(たとえば移行政府に入らないが選挙には立候補資格を得るというやり方)は、米欧らの国際法廷でのラドバン・カラジッチのように、一步一步正義性を奪われるとして、認められないでしょう。

反体制派やサウジらは、自由選挙ではアサドには誰も勝てないので、排除は譲れないでしょう。サウジはさらに好戦的に、対イラン対決をエスカレートさせ、3月11日のアラブ連盟(22カ国・機構)で、ヒズブッラーを「テロ組織指定」に成功しました。当のレバノン外相は「ヒズブッラーはレバノンで国会に多数の議席を有し、閣僚も出している。テロ組織と表現するのは受け入れられない」と反対しました。

サウジの巨額な支援で国家財政を助けられている諸国は、決定的利害がないとサウジの言うままの実情です。サウジの反イラン・反アサド・反ヒズブッラーの攻勢を、ロシアはどう自国の戦略的利益と結び付けるか見ものです。イスラエルとロシアの関係や、ロンドンに集中するボドルコフスキーの「開かれたロシア」や、多くの亡命反ブーチン勢力の動向も活発になってきました。

シリア政府もロシアの軍事兵站支援なしには維持しえませんが、今後の動きはロシア次第でしょうか。

4月4日 10時10分ごろ手術室へ。入口で医務部長も手術参加の服装で迎えてくれて、気分的にホッとしました。彼が八王子での2回の開腹手術の執刀医だからです。「大分難しいと言われたでしょう?!大丈夫ですよ」とニコニコ。「あ、先生いらっしやるなら私も安心!よろしく頼みます」と答えました。もちろん新しい外科医も素直で信頼できるでしょう。でも経験は安心させます。

すぐ麻酔医の説明。前と同じ人で、今回は背中の中と腰上のあたりの二カ所の脊髄に麻酔の痛み止めを打ち、全身麻酔の方は点滴で鎖骨下のCVポートから入れますと作業しながら説明下さった。「これから点滴の方に麻酔入れますよ」と言うので、壁の時計を見ると10時半。すぐ意識不明に。「重信さん!」と呼ばれて目覚めました。「今何時ですか?」

と尋ねると麻酔医が「2時半です。終わりましたよ」と教えてくれてまた眠りへ。

3時半ごろ(房に戻っていて)また名を呼ばれて目覚めると外科医「悪いところはとりました。人工肛門は必要なかった」とおっしゃったので「ありがとうございます。手術は成功しましたか?」と尋ねると「一週間経たないと判りませんよ」とのこと。まだ眠い。血圧は100、体温は37.9度。夜アイスノンで頭を冷やしつつ眠った。

1~2時間おきに看護師がチェックしています。身体には8本の管などが着いて身動きできません。①腹部から血液体液など排液を出す管②背中からの麻酔痛み止めの針のついた瓶のための管③CVポートから栄養バックを入れる管④尿排出の管⑤胃液を輩出するための鼻に通した管⑥右腕静脈の点滴(抗生物質剤)⑦酸素マスク⑧血中酸素チェックの左指に24時間の機材、以上の8カ所8点です。夜に看護師が酸素マスクを口からのものから鼻からのものに変えてくれました。

4月5日 気分は快調です。朝血圧は120台、熱は38度。外科医が診察。「順調にっています。ベッドの上で寝返りを打ったり、身体を動かして下さい。座っても良いです」との診断。「ひもが多くて動きにくいですね」と私。その後鼻の酸素吸入と指の血中酸素チェックのものは取り除かれた。とにかく手術後は第一に何度も深呼吸を心掛けた。それが回復の力になると看護師のオリエンテーションで聴いたので。

4月6日 熱も平熱。でも何故か声が出ない。一生懸命話そうとすると、ぜいぜいと声のもれた裏声のかすれ声。朝の9時過ぎ、ひも(管)付のまま車椅子でレントゲン撮影。その後外科医診察。「もう少ししたらガスが出て楽になりますよ」とおっしゃって「胃液の管は取りましょう。それだけでも楽になる」と鼻の管を引き抜いて、脳静脈点滴用の針も「もういいでしょう」と取ってくれました。これで身体に残っている管は4本に減りました。ずいぶん楽です。声の出ない理由を尋ねると「少し様子を見てみましょう」とのこと。

4月7日 朝麻酔が切れたようです。下腹部がかつと熱く痛み(鈍痛)で、痛み止めの点滴を加えてもらったのですが、ちっとも効果がありません。それに

声は昨日より更に出なくなりました! 他は良いのに……。10時前外科医が登場。「背中麻酔の威力が判るでしょう。これが手術を革命的に変えたのですよ」とおっしゃって背中麻酔を補充してくれた。「1時間位したら効いてきます。これは土曜日まで持ちますがその後は麻酔はなしです」と言い、今日から水は口からこれを一日一本飲むようにと、OSワン(経口補水液)500mlを渡されました。また痛みが和らいだところで尿排出用管は抜いて良いと看護師に指示。少して主治医(内科)が診察。声の出ないのを気にしていました。主治医はOS1を飲む時むせないよう用心深く少しずつ飲むこと、これまで経口していないので水が気管の方に入って肺炎を起こしたりするので、ていねいに注意を促して下さいました。

午後外科医は「麻酔は効いていますか?」と、巡回して来られたので、声が出ないことをまた尋ねました。麻酔を入れる時気道、喉や気管に接触するので、何かそこで問題がおきたのかもしれない。声が出るかはもう少し様子を見ましょう。OS1は飲みましたか?と尋ね、少し飲んだと答えると、「飲めたら大丈夫と思いますよ。気管と関係しているのです。もう少し様子を見て、声が出ないならそちらの専門の先生の診察をしてもらいましょう」とおっしゃいました。声が出ればすべて順調なのに……。

4月9日 昨日から洗面なども自由自在です。今日も起床チャイムの後洗面など、いつもは掃除含めて起床から点呼の間に済ませていましたが、洗面で「点呼準備!」の号令が聞こえます。動きがゆっくりのためでしょう。今日は手紙を読み返しています。

4月10日 今日から少し辛い数日です。昨夜9時点呼の1時間後から麻酔が切れ、痛み止めの点滴は効かず小さいので1時間位で終了。それでも何とかとうとう。今日午前背中の針を抜きました。これであとは腹部とCVポートの2つの管。自力回復に何とか痛み慣れねば!と思っているところです。声もだいたい戻りました。8日にカスレ声が出るようになり、昨日はカスレ声でも出て今日はもうOKです。

4月11日 今日はずでに痛みは薄らぎ、声も出ています。朝、採血とレントゲン撮影。その後外科医診察。まだ便は出ていないこと、声は戻ったことを



伝えました。「今日から栄養ドリンク、メディエフ200Kcal200mlを2本飲むように」とおっしゃいました。お腹すくのでおいしく飲みました。午後外科医再診察で「お腹の管を抜きましょう。普通1週間で抜くのですが、あなたは何度も開腹しているので慎重に、代わりに細い管で体液を外に流すようにガーゼに吸収させる方法をとっておきます」と処置して下さいました。太い管とプラスチックバックの留めるものを抜き取りました。大きな脇腹当てに代えたので、これで管はCVポート1本で大分楽です。2009年の大阪医療刑の時のメディカルレポートを照合すると、大腸手術の後の処置のペースは大体同じ位です。管の抜き取りも1週間、栄養ドリンクも。手術して10日後から流動食が始まっていた。ここでも14日位から流動食でしょう。やっぱり口からいっぱい食べないと力が湧きません。スタミナが不足し、もう本人は今日から普通にいけそう!と思っても「読む」「書く」が長続きしません。今週でほぼ完全にOKとなるはずです。

4月13日 今日お腹の管を抜きました。ガーゼで体液が少し漏れるのをカバーしました。昼からお粥食になりました。外科医は「これから食べだすと腸閉塞とかが危険です。食べ過ぎないこと。全部食べるとロクなことはい。頑張るって食べると考えないように。」と言われました。もうすぐ全回復です。みんなの心遣い、励ましに、支援に心から感謝します。みんなの顔をうかべつつ早く元気になろう!と心が強くなります。窓の外桜の残り花が風に舞って良い日です。感謝!

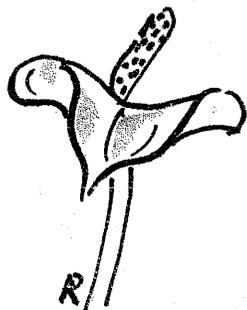
4月14日 明け方目覚めると、グラウンドは水びたしの雨です。体のあちこち「テープかぶれ」でしたが、脇腹のかぶれの痛みは帯状疱疹のような痛さ。午後、主治医が診察し、前にも手術などの後に帯状疱疹になったところと場所的にも近いし、前の菌が潜んでいて免疫力が弱くなると再発すると言われていたとおり、帯状疱疹でした。まだ大腸に薬などの刺激は不可なので、点滴と軟膏の処方をして下さった。夕方に食後便意。手術後初の便通があり、お腹の調子がぐんとよくなりました。皮膚の痛みとかゆみ以外は、もう通常に回復です。でもやはり手術の肉体への負担が、声が出なくなったり帯状疱疹を発生させたりしたのかもしれない。

4月16日 今日は父の命日。82年の6月、イスラエル侵略の年です。丁度旅先にて、しきりに父が思われ、旅先の人々と父のことを語りました。「手紙を出そう」と思ったのですが、しばらくして若ちゃん経由、訃報が伝えられました。あのころのとて多忙で飛び回っていた場所、人々が一緒に浮かびます。

昼のニュースでどうもまた震度 7.3 の地震が熊本・大分を襲って死者続出とのこと。こんな地震国に「フクシマ」を経験して尚、「原発再稼働」「原発輸出」する政策は、何としてでも阻止すべきです。

4月18日 今日は朝、中央棟まで往復 250m～300m歩いて、レントゲン撮影です。庭の八重桜が真盛り。枝葉桜もまだ見頃です。高い樹には白い花が咲き始めています。ベッドの上から遠めに見えた桜、今日はじっくりと見ながら往復しました。

その後、外科医の診察。「今朝の血液検査も問題ないし、炎症や縫合不全の危険はなくなっています。



あとは腸閉塞です。大腸手術後には、必ず警戒しなければなりません。今は三分粥と流動食のおかずですが、明日からもう少し水分を減らした粥にしましょう。食べ過ぎず、半分程度食するように」とのことです。栄養点滴の量は経口食事をする前と変わっていないので、腸をだんだん慣らすように、少量から慎重にとの指示です。ここの食事は、野菜、茸、筍など多いのですが、それらが手術後の腸には悪いので、普通食にはもう少し時間をかけるようです。でも体調はすっかり良くなっています。元の房に朝引っ越しし、点滴スタンドを引っぱって掃除や荷物整理もしました。布団を持つと（ここの布団は重いので）お腹に響きますが、痛みはありません。

新聞では、熊本から大分への地震の地域が広がったことなど、被災者の大変さが伝えられています。全国からの支援やボランティアなど、厳しい状態の被災者たちへの様々なサポート。シリアやパレスチナの、人災・戦争・空爆、弾圧の中、被災する住民たちの厳しさと思わず重ねてしまいます。どの地にあっても被災者支援は、絶望的な苦痛を少し助けることができます。

4月20日 昨日、夕食から五分粥になったのですが、思わず「これ三分粥のまちがいで？」と問い合わせてしまいました。粥の水分は減ったと言われれば、そう？という程度しか変わらず、おかず類も、まったく流動食だったからです。ポタージュスープに小さいパック入りの茶碗蒸し、メデイエフなど何も変化なしの定番です。言われているように半分残しましたけど……。昨日良いことがあったのは4月の花が届いたことです。スプレーのカーネーションの変種。ピンクに白の縁取りの可憐なカーネーション 16 の花を咲かせています。それに一本アマドコロの葉が添えられていました。うっすらと花の匂い。心がリラックスします。

今日は午前中の外科診察がありました。手術跡をチェックし「抜糸をしましょう」と、半分抜糸してくれました。食事はどうか、入浴に問題はなかったか、便通は？と尋ね、引き続き腸閉塞を予防するために、お粥メニューが続くようです。大阪の時には、もっと早く普通食に戻っていたのですが、あの時より年をとっているためか、慎重に処方して下さっています。本人は早く CV ポートからの点滴をなくして、リハビリウォーキングをやりたいところなのですが……。

今日の新聞に注目すべき記事。「表現の自由」に関する国連特別報告者として、デービッド・ケイ氏が日本政府の招きで11日から訪日し、日本での調査を終えて、19日記者会見を行った内容です。日本で政府職員、NGO、ジャーナリストらの話を聞き、「特定秘密保護法や『中立性』『公平性』を求める政府の圧力が、メディアの自己検閲を生み出している」と分析したとのこと。そして、放送法をめぐっては「放送法のうち(政治的公平性を定めた)第4条を廃止し、政府はメディア規制から手を引くべきだ」と提言しています。ヘイトスピーチ対策も「ヘイトスピーチの法律は、悪用の恐れがある。まずは人種差別禁止法を作るべきだ」と提言されたとのこと。まったくそのとおりです。

ちょうど「世界」5月号を読んでいるところでしたが、NHK「クローズアップ現代」のキャスターをつとめた国谷裕子さんと、TBSの金平茂紀さんの文章が、共通の問題に関連して触れています。特に金平さんは「TV キャスターたちはなぜ声をあげたのか」で、歴史的に放送の自由・自立・独立の為に続いていた事件と闘いなどを示しつつ、現在の政権の介入の危険を訴えています。その中で、60年代の「ニュースコープ」の田英夫さんとの2001年のインタビューを再録していますが、TBS に対して政府から圧力がかかって、キャスターを辞めたいきさつを田さんが語っています。TBS 社長が対面で「このままではTBS が危ない。残念だが、田君やめてくれ」と。「これはねえ、実はその根拠になるのは電波法ですよ。電波法第4条というのは、今でもそうですけど、TV 局に認可を与えるのは、日本では郵政大臣、今の総務大臣ですよ」と話している田英夫さん。

先のデービッド・ケイ氏のいう「第4条廃止」こそ切実です。ところが「電波停止」をもち出した高市早苗は、ケイ氏の面会希望に対して、「国会期間中との理由で会えなかった」と、ケイ氏は述べています。政府が招き、まさに物議と問題の焦点の高市は、太刀打ちできない世界の当然の基準の前で逃げだしたわけです。こういう人々が政権を担っている日本。「日本死ぬ」の言葉が零れる庶民の感性を中味すら問題大きくなるまで読めない幼稚な人々です。

金平さんの文から孫引きですが、是枝裕和監督が政権の姿をこう表現しているとのこと。「詭弁を弄して法律の条文に手を加え、舌の根も乾かぬうちにそれを生来手にしている既得権益であるかのように振舞いはじめ、それでも変えようもない歴史につい

ては、自分の都合の良いように解釈を変え、無かったことにする」と。まったく、良心的な人々の憤りは益々拡大していくでしょう。

私の方は、日々体調は戻っています。まだ一つ CV ポートの管を(点滴中)引っぱっています。これがなかなかうっとうしい。忘れて立ち上がったたりすると、引っぱられたりして気付きます。スタミナが今一つですが、それ以外はもう正常化していると本人は思っています。みんなの心配や支えに助けられて、また命を拾いました。みんなに感謝し(もちろん医師たちを含め)大切に生きていこう、と考えるベッドの上です。

4月21日 今朝で帯状疱疹ウイルスに対処した点滴は終了。一週間の点滴でもうほとんど疱疹は消滅。触れるとひりひりする程度です。そして今日の昼食から全粥の食事にグレードアップ。五分粥ではおかずも流動食でしたが、全粥になると噛むおかずになりました。今日の昼食はがんもどき半分、エビと卵を炒ったもの、ヨーグルトに刻みパン。夕食は麻婆豆腐、蕪の酔の物、りんごを小さく刻んだものでした。外科医の言いつけ通りに約半分食するようにしています。熊本・大分地震の混乱は今も続いています。ゆかりの友人たちの顔を思いうかべつつ、早く治まることを祈るばかりです。

それなのに川内原発は停めないばかりか20日には高浜1, 2号機の40年を超える原発が「新基準を満たす」と認める審査書を正式決定したとのこと。「新基準」などは再稼働のための国民世論を欺く装置にすぎないと思います。ひどい政策が続きます。民進党も「30年廃炉」は引っ込んでいます。

デジカメ歌人花吹雪に載れる子供たちの姿。「幼き日の思い出がかすかにやってくる」とのこと。本当に！悩み知らずの日々の花吹雪思い出しています。「一枚ずつ瓦降ろされ土埃り吐く古き家大欠伸する」情景が浮かぶ一首です。

4月25日 週明け。今日は点滴スタンドから解放されるかと心待ちです。

午前中姉が面会に来てくれました。体調悪いところ無理して来てくれて感謝です。こちらの元気な姿を見せることができました。がらがらと点滴スタンドを引っぱっての面会でしたが。

午後2時過ぎに診察。残りの抜糸をしてくださいました。「連休が続くのでお粥のままにします」とドクク

一。私もその方が安心です。連休中に腸閉塞になるのは困るので、お粥のおかずは美味しいものもここ数日ありました。メニューによっていろいろです。「CVポートの点滴はまだ必要ですか?」と尋ねると「とりましょう。入浴やその他不便ですか?」と聞くのでうなずきました。そしてCVポートの針を抜いてもらいました。やっと身体が自由です。入浴、運動もOKといわれました。もう回復状態です。夕食メニューは全粥、エビとほうれん草のお好み焼きに大根おろしをかけたもの、豆腐とたまねぎの煮物、かぼちゃと小豆の煮物、みかんの缶詰すべて少量ですが今日は美味しく頂きました。

追記、夜8時過ぎに郵便物が届きました。その中の一番上に宮崎先生の訃報です……。「去る四月十日九十歳の天寿を全うし永眠いたしました。茲に謹んでお知らせ申し上げますと共に故人が生前賜りましたご厚誼に対し心よりお礼申し上げます。尚葬儀は故人の強い意志により近親者のみにて執り行いました併せてお知らせ申し上げます。4月22日」と夫人の名で訃報が届きました。もしかして……と心当たりがあつて気にしていました。再会をお互いに約しながら叶えられませんでした。公判にいつも来て下さり、公判の後も面会で刑執行直前まで励まして下さいました。そして八王子に移ってからはずっとお便り俳画と親しく交流して下さいかけたかけがえのない恩師です。感謝で一杯です。宮崎先生ありがとうございました。

4月26日 もう八王子も窓を開けて20~30分は半気です。ツツジの花がどんどん蕾を開きはじめています。

今日は手術以来、初めてのベランダ運動です。ウォーキング1500歩とラジオ体操で丁度30分。晴なのでうっすら汗ばむ一時でした。四方田先生のお便り。「3月からパリの大学で『日本皇民化運動時代の朝鮮映画』という学会発表した後、そのままパリに留まっています。ここにいとペイルートがとても身近に感じられます」とあります。友人たちとの交流を楽しみ、レバノン料理は仏では身近ですし、レバノン出身のドキュメンタリー監督とも語り合い、四方田先生が手料理の手巻き寿司で喜ばせたり、楽しみつつフィールドワーク中です。良い出会い作品の可能性が広がっていますね。先生のかつての病気はもうすっかり過去のものになっている様子。でもご自愛下さい。

4月28日 4・28! 沖縄闘争の日だなあと窓辺に行くと雨。今日は一日雨模様です。親類の面会が午前、大谷弁護士面会が午後予定なのですが……、連休前で、金曜日入浴が今日(木曜日)になっています。面会予定が入っているのに、朝早めに入浴してもらいました。ちょうど風呂上がりで、髪はまだ乾かないうちに親類の面会。手術後の様子を伝えました。「大丈夫あなたは死なないから」と励まされました。もしもの時にいろいろ書いて送っていたのですが、雨の中感謝!

房に戻って診察の呼び出し。主治医から「今日は私の方から生体検査の結果を知らせます」と、写真などを示しながら詳しく説明して下さいました。大腸を20~25センチ切り取ると外科医に事前に言われていましたが、10センチぐらいでした。その写真を示しながら、大阪で2009年に細かい金属で縫合した箇所を含みこんで、その上の方から切除したものと説明された。腫瘍は主治医自身が内視鏡による切除EMR術を中途断念していたので。(生理食塩水を腫瘍の下に注入しても腫瘍が浮かび上がらず、切除できず断念)少し深部まで腫瘍が広がっているのでは……と、危惧されたそうですが、生体検査結果では「腺腫内癌」で、長径13ミリ、短径7ミリの腫瘍。粘膜層にまだ留まっており、下層には及んでいなかったし、すべてきれいに取りきれたと説明して下さった。これでこの癌の正体もわかり、安心です。

主治医は再発や腸の壁に隠れて見逃していることもあり得るので、半年後に(いつもは1年に1回のところ)内視鏡検査をしますとおっしゃっていました。診察でほっとしました。

午後は大谷弁護士の面会。ちょうど生体検査の結果を聞いたところだったので、それを含めて、この間の病状について報告しました。また、寂聴さんと「若草プロジェクト」を立ち上げたことも話題になり、若い弁護士たちが中心にやっているとのこと。そうか2000年の逮捕時、直接にお会いした大谷弁護士は50歳でした。今や大ベテランだと改めて感じました。久しぶりの忌憚のない話し合いの一時でした。

夕方、姉やUクンの手紙でも宮崎先生の訃報を伝えてくれました。Uクンは「宮崎先生は国際法学者の立場で母校の師としてあなたの裁判を見守っていました。地裁の公判にも何度も来て頂きました。横なぐりの雨の降る日に傍聴券の抽選に長い列ができた時に、前の方だと雨がかからないので、我々が気を遣っ

て先生前へ行ってくださいと言っても、いやここでいいと言って悠然と肩を濡らして並んでおられたことがあります。凄く偉い先生なのに少しも偉ぶらず柔和な佇まいの人でした。僕らが明大で、生意気なことを言っていた時の学生部長で、毅然と学生と対峙し、深夜の大衆団交にも一歩も引かなかったことを覚えています。僕が『バカヤロー』と野次を飛ばしたら、『今僕をバカヤローと言いましたが、私はバカではありません。本校を首席で卒業しました』と言い放ち、険悪な大衆団交の場がどっと緩んだことがありました」など、宮崎先生のことを書いておられます。

武勇伝いっぱい先生でしたね。学生大会でストライキ決議を採択し、団交決裂で正門にバリケードを机・椅子で築き始めた時でした。夜遅い団交決裂で、記念館から出てきた宮崎先生は築きかけのバリケードに身軽によじ登り、「国破れて山河在り〜」と、とうとうと吟じ「学生諸君! 風邪を引かないように!」と訴えて、飛び降りました。拍手と「ナンセンス!」の騒然を今も鮮やかに覚えています。

それに、右派と自治会の学生のゲバルトには割って入り、「諸君! 棒はいけません! 素手でやりなさい!」と叫んでいたのには唖然とさせられたと語り草でした。ローマの「議民官」のように学生の立場を護る学生部長を自覚していた宮崎先生。神田署から被害届を出すよう言われて断固拒否し、学長が出してしまったのに抗議して学生部長をやめたのも当時の私たちは知りませんでした。「チビッコギャング」の仇名で理事会側にとってはうるさい先生でした。

「明大記念館を残したかったが耐震上無理と分かり、リパティータワーとし、そのタワーに記念館の石を記念に展示した」と、先生が総長の時建てたリパティータワーで、私の出所の乾杯をしましょうと約束して下さったのに……。

私たち学生も勢いに埋没せず、党派に左右されず、次代に役立つような自治と自由を獲得するような闘い方をできたらよかったです。現在の大学の自治の喪失に責任の一端を感じざるを得ない世の中です。

Kさん新緑と山藤の美しい中、歩かれたとのこと。写真はエビネ蘭の庭の群生。いい花ですね。自分史1を書き、書くことでいろいろな人に愛され守られてきたことに改めて感謝の思いが湧くとのこと。良い文が生まれる気配です。

4月30日 “四月尺恩師の訃報に数々のエピソード

に笑みつつ弔いとする”

手術準備から手術に明け暮れた四月が終わりました。考えれば、2月の検査以降、3月はEMR術の準備、手術を中断、4月は手術とその回復と、この3ヵ月近く腸は洗浄からかき回しから切除と非平常時でした。でも、人間の回復力はすごいです。手術した日から一日一日の微々たる回復力。その小さな変化は喜びです。「手術を乗り越えると、何か武勇伝のように自慢したくなる」と語っている人がいましたが、私もわかる気がします。獄中で四回もうまくいったから言えることです。

私も言葉を遣って手術しました。また、これまでより、2012年の手術時より改善されていたのは「手術後体位を変えないと、エコノミークラス症候群になる」と注意を促すとともに、手術室に運ばれる直前に、きつめのハイソックスを予防として穿かされたことです。手術の翌日にそれを取りました。また、手術後に翌々日朝まで電気毛布が掛けられていたこと。すごく寒いので、手術で目覚めたら手の届くところにカイロを用意していたのですが、暖かい毛布には助かりました。今回の医師やスタッフの方々、友人たち、家族の支えの中で元気になっているとしみじみ感じています。その分元気に生き抜こうと思います。みんなに感謝。

もう明日から5月、パレスチナのナクバの5月、沖縄に「本土復帰」の名で基地が押し付けられた5月、リッグ闘争の5月。新しい気持ちで前へ!

133号の誤植の訂正とお詫び	
9頁左列22行	王政国家→王制国家
10頁右列下から1行	鶴見俊介→鶴見俊輔
11頁左列4行	味のある分→味のある文
12頁右列31日の9行	「政治の場で〜」→「政治の場」で
13頁左列下から10行	支給再会→支給再開
15頁左列下から3行	作歌→作家
15頁右列2行	作歌→作家
15頁左側下から18、19行	「分かれ」→「わかれ」
16頁左列下から6行	11・3→11・13
20頁右列下から15行	パレスチナは、イギリス→
	パレスチナは、当初国際管理地域とされた後に、イギリス

四月の短歌日誌

- 4月1日 レバノンより虹の写真とメッセージ手術を案じた吾子の便り
- 4月2日 桜花揺らし跳び交う小鳥たち朝日を浴びて黄金に輝く
- 4月3日 四度目の癌の手術を明日に控え不測を見据えて言葉を綴る
友の文手術の前夜に読み返し暖かい意志が身体に溢る
- 4月4日 手術台「麻酔がこれから入ります」見上げる時計は十時半を指す
麻酔より目覚めた我が身八本の管に繋がれガリバーの如し
- 4月5日 自らの力を信じ繰り返し深呼吸する生命拾いて
春の修羅再び命拾いたり生きるということ嘯みしめている
- 4月6日 獄の庭観桜会のざわめきにベッドの上で空の青見る
友たちの国賠勝訴の文届く痛み忘れて大いに喜ぶ
- 4月7日 雨の打つ桜花のこと気にかかる失語症のように声の出ぬまま
- 4月8日 点滴のリズムに合わせて春の歌口遊んでみる手術を終えて
- 4月9日 獄窓に立てば満開桜花東も西も塀覆い咲く
- 4月10日 風に舞う花片一つ病室に届きて何か良いことあるらん
次々と届く友らの便り嬉し葉の如く心に滲みる
ラジオより花見日和の華やく声じつと聞き入る週末の獄
- 4月15日 新聞の一面で知る地震異常挙げて誓わん脱原発日本
大雨に最後の花が散り急ぐシリアの友らは生きているのか
- 4月16日 パレスチナの若者に止めの処刑せし兵士を称えるネタニヤフの無法
- 4月17日 獄中で四度目の手術九つ目の癌命拾いて青空見上げる



中東2016年—「サイクス・ピコ密約」から百年(下)

重信 房子

3、三枚舌外交の果てに

アラブ人の反トルコ革命は勝利し、1918年10月30日フセインの三男フェイサル司令官率いるアラブ軍はダマスカスに入城した。そして、1920年3月アラブ政府の樹立を宣言した。しかし、翌月、戦勝国によるサン・レモ会議において旧「サイクス・ピコ協定」の地図に沿って旧オスマン領の大シリアは分割されていった。イラク、パレスチナ、ヨルダンが「英委任統治領」という名の植民地化、シリア、レバノンは「仏委任統治領」として植民地化されることになった。

革命のおきたロシアを除いて、サイクス・ピコ密約を若干修正しながら、このサン・レモ会議は、またバルフォア宣言の内容も認めた。密約や私的な約束であった「ユダヤ人のための民族郷土」建設がここに至って初めて公的に認められることになった。しかし、「フセイン・マクマホン書簡」は一顧だにされなかった。すでにマクマホンとのその約束にもとづいたアラブ政府が実体化しているというのに、ここにシオニストと英国の一体となった謀りごとが示されている。「公的なもの」となったバルフォア宣言の約束は、後に正式に国際連盟で承認されていく。このサン・レモ会議こそ公な「パレスチナ問題の発生」をもたらしたと言えるのである。この会議に加わったのは、英国、仏、伊、日本などである。日本もまた、パレスチナ問題（イスラエル建国）に、初めから関わっているのである。このサン・レモ会議によって、オスマン帝国時代にあった各州の民族や宗教による境界行政区分は配慮されることなく、定規で引いた直線の国境線がほぼサイクス・ピコ密約に沿って引かれた。その結果、民族の分断や部族の分断となって後の紛争と対立の種になっていった。イラク、クウェートの領土紛争は、サダム・フセインがイラクのバスラ州の一部であったクウェートを自らの領土として併合を計り、第一次湾岸戦争のもとにもなった。また、シリアの宗主国となった仏が、シリアの領土、ハタイ県をトルコに割譲した結果、シリアとトルコの領土対立は現在まで続いた。911 kmに及ぶシリア・トルコ国境地帯に住むトルクメン人、クルド人、アルメニア人、ギリシャ正教、

スンナ派、アラウィ派など、民族、宗教の共生が分断され、支配されるに至るのである。

1920年のサン・レモ会議の決定に基づいて、仏軍は拒否するアラブ軍を攻撃し、ダマスカスに入城した。フェイサル司令官のもとにつくられたアラブ政府は制圧破壊された。英国が約束したアラブ独立国家は為されなかったのである。当然、アラブ民族は反英・反仏闘争に立ち上がり、アラブ民族運動が反オスマン闘争を引き継いで広がった。その一方で、マッカの太守のハーシム家の家長フセイン一家は「独立」の代わりに、英植民地支配の「傀儡」の役を請け負わされることになった。権力の欲しいフセインらハーシムファミリーは、それに満足して受入れていく。ダマスカスから追われたフェイサルは、イラクの初代王として迎えられた。しかし、石油利権など権力は英国の直接支配にあり、権限は限られていた。フセインの次男アブドゥラーは、やはり英国の傀儡として、ヨルダン川東側のトランスヨルダン首長として迎えられた。

この頃すでにサン・レモ会議決定を奇貨として1920年には、英委任統治領の初のパレスチナ高等弁務官はシオニストのハーバード・サミュエルが就任していた。このようにシオニストは深く英国中枢に力を持っていた。「英国委任統治」といっても、要は植民地支配であり、それをシオニストが行うということである。こうして、パレスチナへのユダヤ人入植がシオニストに都合良く進められたのは言うまでもない。サミュエルのパレスチナ赴任時の人口の割合は、パレスチナ・アラブ人9割、ユダヤ人口は多く見積もっても1割程度に過ぎず、土地も持っていなかった。サミュエルは土地購入、移民誘致（当時ユダヤ人はパレスチナではなく、米欧への移住人口が多かった）など、将来のユダヤ国家の土台作りを行っていく。このサミュエルの英委任統治政府はシオニスト代表機関設立も許した。シオニストたちは、この機関を軸に植民を通して、社会のインフラや下部機構を作った。また、ユダヤ人の間に、政府に相当する「国家評議会」、軍の萌芽となる武装機関として「ハガナ」を設立し、ヘブライ大学を開校するなどして、着々とパレスチナにユダヤ国家をつく

る準備に入った。一方、当時のパレスチナ住民は、アラブ規模の反英反仏反植民地闘争に立ち上がり、その一翼としてパレスチナの英国委任統治の正当性を認めず闘っていた。パレスチナの独立を求め、英国委任統治を前提とする行政機関作りを受け入れなかった。その結果、社会のインフラ、下部構造など国家の萌芽的な機能作りには着手し切れていない。

こうした時代に、アブドラーにヨルダン川東岸の首長国家を任されることになるわけである。1922年には、サン・レモ会議に基づいて「正式」に国際連盟は英国のパレスチナ委任統治と共に、パルフォア宣言のごとく「ユダヤ人の民族的郷土設立」を承認した。英委任統治当局は、アブドラーに対し、首長に就く条件として次のように誓約させたという。

第一に、ヨルダン川西岸でのシオニストの政治活動を認めること。第二に、激しい反仏反植民地解放民族運動の広がっていたシリアに対する仏の支配を認めることであった。アブドラーはこうしてヨルダンを手に入れた。

一方、父親の太守フセインは英国のそそのかしを真に受けて、1909年に、アブドル・ハミドのカリフの退位以来の空席のカリフとなるべく自らカリフ宣言した。そして、ヒジャーズの王として長男を皇太子とした。しかし、このカリフ宣言は実績に欠け、あちこちの反発を受けたらしい。当時、アラビア半島をさかんに制圧していたナジェッド地方の王、後の初代サウジアラビアの王となるアブドル・アジーズ・イブン・サウードの侵略によって、1924年ヒジャーズ王国はつぶされてしまった。カリフどころか聖地も、太守の地位も奪われ、追放され、次男のいるヨルダンに逃げ延びた。この時、「マクマホン書簡」で唆した英国は、フセインを助けることはなかった。

「サイクス・ピコ秘密協定」を基本としたサン・レモ協定は、第一次大戦に大いに貢献したはずの米国の分け前がないことに、米政府は激怒した。英政府は「アメリカはオスマン・トルコに宣戦布告をしていないから、トルコとの平和協定に米国は関係ない」とつっぱねて、戦利品をめぐってもめた。が、結局、トルコの石油株の四分の一を米国に引き渡すことになった。このように、「サイクス・ピコ密約」「サン・レモ協定」を基礎として、トルコ支配に代わって、英仏直接支配と米国の介入も加わって、アラブ中東地域植民地化が始まる。当然にも、反帝植民地闘争

が汎アラブ規模で、闘われていくことになる。

パレスチナでは、サミュエルの後に続いた高等弁務官は必ずしもシオニストに有利に統治したわけではない。英支配下の石油利権のために、アラブと対決していくことは得策でないためである。アラブ独立をめざす民族解決闘争の高まりの中で、「ユダヤ人に国を奪われる」とパレスチナ人も危機感を持ち、1920年代以降30年代には、各地で蜂起抗議が続いた。統治能力を欠いた英国は、ユダヤ人入植者をパレスチナ人口の三分の一以下に制限するなどの措置を取り出した。

ユダヤシオニスト側は「英国の裏切り」に怒り、二つの行動をとった。一つは対英武装闘争である。もう一つは、米シオニストを中心に米政府を動かす工作である。39年に第二次大戦が始まると、その間に、米シオニスト中心に1942年「全パレスチナをユダヤ国家に」と決議（ビルトモア決議）し、また、連合国側を支援して、反ナチ闘争を闘い続けることになる。結局、第二次大戦後、英国は委任統治を放棄する形で国連にパレスチナ問題を付託した。第二次大戦後、再び、パレスチナ独立は阻まれたのである。こうして第二次大戦を経て、ユダヤ人虐殺の責任を負うべき欧州は、その責任をパレスチナに押し付けた。そして、植民地支配の延長に「パレスチナ分割案」が国連決議の名で作られることになった。今度はシオニストの奏功によって英国に代わって、米国が強力にユダヤ建国を支持した。

1947年11月29日、国連総会で、パレスチナ分割案が可決された。（国連決議181号、賛成33、反対13、棄権10。国連加盟のアラブ6カ国、エジプト、イラク、レバノン、サウジアラビア、シリア、イエメンは反対。英国は棄権。日本は国連未加盟。米国、仏、ソ連は賛成した。）パレスチナ人は決定権もなく、自らの領土が奪われることになった。この時点で、パレスチナ・アラブ人の土地占有率は全パレスチナの93%、ユダヤ人側はわずかに7%にすぎなかった。しかし、この国連のパレスチナ分割決議では、パレスチナ・アラブの領土は全パレスチナの43.5%に縮められた。反対に、ユダヤ側の領土は、海岸の戦略要所を含めて56.5%へと拡大する不当なものであった。そして、エルサレムを国際管理下に置くことと決められた。当時の人口の正確な統計はないが、48年の5月時点で、パレスチナに住むアラブ人は150万人程、ユダヤ人は60万人程といわれている。すでに47年の決議を受けて、

ユダヤ武装機関は行動を起こし、全領土略奪を目論み、パレスチナ人の村、町、都市を襲撃し始めた。英国の委任統治の終わりが近づくと、その襲撃はさらに激化し、48年4月9日から10日にかけて、子ども、女性を含む皆殺し作戦で、ディル・ヤシーン村の254人が虐殺された。パレスチナ側は恐怖の中、多く虐殺を逃れて、パレスチナからの避難を強いられた。5月14日委任統治が終わった同日、イスラエルは建国を宣言した。この段階になって、アラブ諸国はイスラエルの建国を認めぬと反イスラエル戦争に至るのである。この時のパレスチナ難民は約85万人にのぼった。

パレスチナ分割決議に賛成した米国とソ連は、「冷戦」の時代に転じていく。「冷戦」は、中東における米欧政府の反ソ反共戦略の砦として、イスラエルを育てていった。こうして、中東にはめ込まれたイスラエルは、米欧と戦略的同盟関係の中で、パレスチナの占領支配を次々と推し進めていったのである。

このように、第一次中東戦争以降現在に至るまで、アラブ・イスラエル問題は解決しえずにある。

4、「サイクス・ピコ時代」の遺産

「サイクス・ピコ密約」の時代（英の三枚舌外交の時代）を振り返る時、それが「過去」のものではないと強く認識される。百年前と変わらず「オリエンタリズム」は続き、「三枚舌外交」を謝罪したこともない。ことに、第二次大戦の「敗戦国」ではなく「戦勝国」となったこれらの国々は、米欧中心主義を変えようともせず、引き続いて「イスラエル建国」にはじまる植民地支配を維持しようとしてきた。

この「サイクス・ピコ」時代の「遺産」の根本的な問題は、「中東のことを中東で決定し得ない構造」（言い換えば、中東の問題を中東で解決させない構造）が作られてきたことにある。常に米欧の判断、米欧の中東政策が中東を制約する構造になっている。なぜなら、「サイクス・ピコ密約」と「パルフォア宣言」「サン・レモ協定」を出発点として、「イスラエル建国」という、全く新しい問題が戦後アラブの地に嵌め込まれることになったためである。第二次大戦を通して、英・仏植民地解放闘争を闘い、独立を勝ち取ったアラブ諸国は、冷戦下この現実に向かうことを強いられた。新しい国づくりは、「対イスラエル戦争国家化」を強いられる中で、正常な国づくりを遮られ、臨戦体制、軍人のヘゲモニーによる

国家体制へと至った。今もイスラエル問題（パレスチナ問題）は解決されず、中東の混乱の基底要因をなしている。米欧諸国は、冷戦時には「反共反ソ戦略」の中東における要として、イスラエルと同盟強化する一方で、石油利権獲得のために、王制国家群を育ててきた。

現在の中東の混迷は、米国・イスラエル戦略同盟関係が作り出す、米欧政府の中東政策におけるダブルスタンダードにある。国連総会、国連の各委員会で、何度も示されてきたように、世界のほとんどの国々がイスラエルの占領地からの撤退を求め、国際法無視を批判し、核兵器の特権を許さず、「中東の非核化」を求めてきた。それらは、米政府の拒否権によって拒まれ、実現されずにある。2014年12月国連総会は「イスラエルが核兵器を放棄して中東を非核地帯とすること」を求める決議を行った。賛成161カ国、反対5カ国、棄権18カ国で可決されている。（日本は賛成。米国・イスラエルは反対。）

また、2015年5月核不拡散条約（NPT）再検討会議において、中東非核地帯構想を含む最終決議文が採択されないという異例の事態に至った。NPTに加盟していないイスラエルのために、米国がNPT会議の全会一致方式を利用して妨害したために、採択は流産したのである。イスラエルネタニヤフ首相は、米国と米国に同調した英国・カナダにすぐ謝意の電話表明を行っている。

一方、2015年12月の国連総会では「パレスチナ民族自決権」を177カ国が支持表明している。このように米国とイスラエルの関係はこれまでも中東問題の公正な解決の道を閉ざしてきた。中東問題を中東で解決し得ない状態を常態化させてきた。サイクス・ピコ時代から引きずってきた中東の戦乱の歴史的原因となっている「イスラエル問題」を解決しなければ、混乱はくり返される。「イスラエル問題」とは歴史的経緯をふまえて、イスラエルのパレスチナ・アラブ占領地問題を公正に解決することにある。まず、イスラエルが占領地を返還し、国際法違反を正すよう米国を含む国際社会がイスラエルを統制することである。

「イスラエルは「弱者」ではなく、「中東唯一の軍事大国」であり、民族宗教を根拠とするイスラエルの国家理念はアメリカの多民族主義の国家理念とは異なっており、パレスチナに対する二級市民扱い、イスラエルがアメリカと価値を共有する民主国家であるという主要を疑わしくする」と、ジョン・ミア

シャイマーとスティーン・ウォルト著の「イスラエルロビーとアメリカの外交政策」が述べている。

著者は、「米国の無条件というべきイスラエル支持は、中東での反米感情を高め、米国の国益を損なっており、国益優先の政策をとるべきだ」と主張している。毎年30億ドルを年度始めに一括支払いで、イスラエルに用途は聞かない直接援助を行っている。さらには、82年以来イスラエルにとって死活的意味を持つ国連安保理決議を32回も、拒否権を使って阻んできたこと、その偏向を論証している。

しかし、今では米国に根を張ったイスラエルロビーの数々の団体が米大統領選、上院、下院議員選挙を左右する力を持っている。かつての大英帝国が世界に覇権をめぐらしていた時代には、英国政府の内外でシオニストたちは要求を実現してきた。今では、世界の第一番目の強国米国政府の内外で、シオニズムとイスラエルのためのイスラエルロビーの闘いは続いている。彼らはユダヤ系の投票ばかりか、謝罪、動員、キャンペーンによる力がある。少しでもイスラエルの政策批判をすると「ネガティブ・キャンペーン」によって、事実と反する膨大な宣伝戦によってその議員を落選させる力を持っている。こうした例が重なり、正当なイスラエル批判もできなくなっているという現実がある。(この実態については、先の「イスラエルロビーとアメリカの外交政策」の著書の他に、三井美奈著「イスラエル—ユダヤ人パワーの源泉」に詳しい。) その結果、オバマ大統領を批判するネタニヤフ首相の米議会演説が民主・共和両議員の熱烈なスタンディングオベーションを受けることにつながっていくのである。

こうした米欧の姿勢が、はじめに述べたように、ネタニヤフ政権を増長させ、和平交渉を拒み、次々と新しい障害をつくりだし、「エルサレムのユダヤ化」から全パレスチナへの弾圧支配を常態化させているのである。

今では、米欧諸国は、石油などの資源の利権ばかりか、自らの権力維持をイスラエルロビーに制約される有様である。加えて、軍事産業の利潤のために中東の戦乱は利用され、必要とされている。そしてイスラエルがガザの住民を兵器の実験対象にしたことに似うがごとく、米、仏、英、ロシア含めて対IS戦争で、巡航ミサイルまで、実践に登場している。アラブ民衆の人権や人命は、かつてもそうであったように軽視されたままにある。

中東の構造を変えるためには何よりも米欧の中

東政策の「ダブルスタンダード」を正し、占領地問題を解決し、中東を非核非戦地帯化の方向へと戦略を定めることである。こうした道筋によって、イスラエルを含む善隣外交のもと、中東の問題を中東で解決する道を作り出すことができる。

5. 中東の問題を中東で解決する道へ

こうした中東の歴史的な根本問題を見据えて、「IS問題」「シリア問題」をとらえれば、何よりも軍事攻撃、空爆をやめ、非軍事的な政治的解決へと国際社会が求める必要がある。

中東の混迷は、第一に、イスラエルの継続的な占領と弾圧支配、第二に、米欧のダブルスタンダードによるイスラエルへの不公正の放置、第三に、対イスラエル戦争対峙を強いられたアラブ軍事政権の長期独裁の強権人民抑圧、加えて、グローバル経済のもたらす格差や失業、それらを解決する方が奪われてきたことにある。中東の現実、政治的経済的に行き詰まり、もたらされた混迷である。これを政治的に解決しようという道が閉ざされているところで、武装、宗派闘争として噴出してきている。何よりも現実を軍事ではなく非軍事へと、政治的に公正に解決する道を開く必要がある。

2015年10月16日のウォールストリート・ジャーナルで、92歳のキッシンジャーが中東問題に提言している。「中東の地政学上の枠組みが崩壊している」ととらえ、オバマ大統領の中東政策を批判し、米国の中東秩序を安定させる役割が瓦解していることが、ロシアの軍事行動をもたらしたとしている。そして、最近の議論が戦術次元ばかりで、戦略思考が欠けると指摘し、中東の現実に対して、原則に基づき優先順位を確立すべきだと主張している。

キッシンジャーは、第一に、IS打倒がアサド退陣よりも緊急であり、シリアをテロの聖域にさせず、IS打倒第一にすべきこと、第二に、ロシアの軍事行動は黙認しうる共通の利がある。第三に、ISにかわって穏健スンナ派または域外勢力が支配することはイランの支配より望ましい。ISから奪還した地域は、イラクやシリアの関係地域に居たスンナ派の統治に任せること、第四に、シリアにアラウィ派とスンナ派の連邦制を構築する。その中で、アサドも役割を果たすことができる。第五に米国はスンナ派国家に対して、軍事上の確約を実施する。第六に、イランが過激派支援などの地域覇権行動を止めた時、

米国はイランと対話するべきで(つまり、今ではない)などと述べている。(要旨)

キッシンジャーは、ユダヤ資本をはじめとする国際資本とシオニズムらのエスタブリッシュメントの意向を代弁し、大局観で時代をリードしてきた。71年には米中国交を開き、反ソ反共戦略を強化し、ベトナム戦争の敗退ムードの米国に新しい道筋を開いた。73年には、中東戦争で、日本をはじめ「石油」のために資本主義国が次々とアラブ産油国の要求に沿って、「イスラエルの占領地からの撤退」を求めたことを戦略的教訓とした。そして、各国の経済利害を政治権力で調整する場として、「先進国サミット」を提唱したのはキッシンジャーである。さらには、73年第四次中東戦争の兵力引き離しシャトル外交によって、エジプトと米国の新しい関係を開いた。そして、その機会に、イスラエルの安全保障を軸に、「中東の安定」を計る78年「キャンプ・デービッド合意」に至る道筋を開いたのも、また、キッシンジャーに象徴される者たちである。翌79年に起きたイランのイスラーム革命によって、キャンプ・デービッド合意は一層強化された。この「キャンプ・デービッド路線」(キャンプ・デービッド体制)は、今回のキッシンジャー提言の下書きにある。つまり、キッシンジャーの言う中東政策の原則とは、「イスラエルの安全」であり、また、「石油」である。「米欧の中東政策は、語られない主役を常に中心に据えている」とアラブでは語られたものだ。アラブ問題、中東問題で語られない「イスラエル」が常に判断の中心に据えられているからである。

今回のキッシンジャー提言もそうである。キッシンジャーはISを第一の敵として排すること、第二に、イランを排除することを提言している。イランはこれまで「イスラエル建国」を正当と認めていない。そのため、反イスラエルのパレスチナのスンナ派ハマス、レバノンのシーア派のヒズブッラーなど宗派を超えて支援してきた。そのことが、シオニストやイスラエルがイランを排除する基本にある。キッシンジャー提言の第3に、穏健派スンナ派国家の「軍事上の確約」に示されるのは、サウジ産油国の湾岸諸国の防衛である。このキャンプ・デービッド路線にもとづく米欧の中東政策こそ、サウジを「穏健国家」として放任してきた過ちがある。サウジは、米欧に従順・友好な外交を示してきた一方で、IS同様もつとも厳格なワッハーブ主義によってシャリーア統治を行い、度重なる人権問題を起こしてきた。

米欧政府らはそれらを不問として、許してきたのである。このキッシンジャー構想「イスラエルの安全保障とスンナ派穏健国家を中心として形成される中東秩序」こそ、彼言うところの「中東の地政学上の枠組み崩壊」を導いてきた原因である。彼らの戦略そのものが問われているのである。かつて中東の新たな枠組みとして、イラク侵略後の軍政支配の中でもすでに語られていた。クルド独立国家構想である。イランの影響力が拡大し、イラク政府と連携が進めば進むほど、米欧はクルド独立を後押しするだろう。中東に非アラブ国家を作り出すこと、それらは、イスラエルの安全保障の観点から、これからも再考されるだろう。

また、キッシンジャー提言の新しい点は、第一に、ロシアの中東における役割を一定受入れていることがあげられる。ロシアは、かつてのソ連のように、イスラエルと対立する関係ではない。百万を超えるロシア系ユダヤ人がソ連崩壊後イスラエルに移住した。今では四人に一人は、ロシア系ユダヤ人といわれるように、新しいロシア・イスラエル関係が結ばれた。プーチンがイスラエル訪問時「イスラエルの中にロシアの一片が含まれている」と発言したように、親密である。ただ、11月のトルコによるロシア機撃墜と時を同じくして、ロシアとイランの原子力協力やミサイルなどの戦略武器の供与など、ロシアの中東政策はイスラエルも警戒しているはずである。ロシアがイスラエルに対してどのような政策をとるか、米欧らのロシアに対する対応もまた決まるだろう。ロシアがイスラエルに対して、不利益、敵対的になれば、米欧政府もまたロシア包囲を強めるといった具合に。

第二の点は、アサドの役割を容認するというメッセージである。これはエスタブリッシュメントの中からは初の発言と見てよい。かつて「中東和平交渉」において、初めてキッシンジャーが「PLOを交渉相手と認めてもよい」(93年1月)と発言したように、中東情勢の力関係を戦略的にとらえた判断であろう。こうしたキッシンジャー提言は、一部のエスタブリッシュメントの意向であり、米欧の中東政策に影響を与え始めていると見える。もつとも大国間の一方的思惑というこれまでの手法でしかないが、

キッシンジャー提言はすでに崩壊した枠組みを再建することを求めている。現在の混迷は、こうした米欧の判断・決断の押し付けの積み重ねによって生まれており、解決には向かわない。何よりも空爆

を止め、不公正なダブルスタンダードを改め、まず、中東のことを中東の国々で決定するシステムへと変えるよう支援することこそ問われる。当然イランの役割は、排除されるものではなく、その中で重視される必要がある。イスラエルもまた、同様である。イスラエルが中東の当事者として役割を果たせるようになることは、まずもって国連決議や国際法に則って、占領地返還することから始まる。そして、パレスチナ、シリア、レバノン、エジプトら、隣接する国々と正常な関係を開くことである。国際的基準に照らして中東を支えることこそ「有志連合」ではなく、国連総会に示される非核地帯化の始まりとすることができ、非戦地帯を広げうる。大国が決定権を占有し、恣意的な中東政策を導く時代ではない。

そうした観点から見る時、シリア和平に向けた2015年12月18日の「国連安保理決議」は簡単ではない。「アサド政権排除」が前提とされなかったこと、政権移行は「シリア大主導」という点でロシアも賛成した。また、ロシアの提案で、シリア問題会議に10月末のウィーン会議以降イランも招請された。これまでのシリア内戦の流れを見ると、結局アサド政権とロシアの見解に米欧が歩み寄ったと見ることができる。実態上から見て、アサド政権をすぐに排除しては成り立ち得ないことを米欧も認めざるを得なかったのだろう。しかし、反アサドの音頭を取ってきたトルコのエルドアン大統領、サウジ・サルマン王、カタールらとその指示や支援のもとに、闘ってきた反体制勢力は米欧の変心に服するとは思えない。また、トルコ、カタールに支持されてきたヌスラ戦線などの排除された勢力やISには何の有効性も持ち得ない。問題は軍事ではなく、いかに非軍事・政治的解決可能な道を開くかにかかっている。

このシリア問題においても、まず、軍事的局面を非軍事的局面に転ずるために「過剰」な程の復興資金を投入することによって、まず停戦、非戦地域を

広げることである。それは、シリア国内で、小規模で行われているので、さらに拡大すべきである。そして、シリア人自身が決定する構造を育て、政治的解決を促すこと。そのためには、スンナ派諸国家や米国らが武器供与を中止することである。そして、復興へと方針を変更することが問われる。

さらに、当面の中東問題の解決には、まずもって中東主要国家、イラン、サウジアラビア、エジプト、トルコの討議の場を設定すべきである。非核非戦地域化への道りは無理としても、中東における安全保障の展望をふまえ、まずもって、武力の放棄、武器回収の方向へ、緊張緩和にむけて、地域大国が話し合う場こそ必要である。こうした国々が戦争拡大に責任ある主体であり、中東問題を中東で解決する第一歩とすべきであろう。このようなアプローチこそ、対IS対策であり、これまでの武器の膨大な出費を住民、難民帰還支援と復興に注ぐことによって、若者たちがIS予備軍ではなく、中東の新しい希望のベクトルへと歩みだす一歩となるはずである。

しかし、ISの発生は、これまでの歪んだ中東の現実の帰結であって、原因ではない。何よりも「パレスチナ問題」を直視し、和平に向けた解決に真剣に取り組むことこそ、新しい局面を開く道である。

(2016年1月5日記)

参考文献

- 「湾岸の興亡」(山田栄三著・新潮社)
- 「イスラエルロビーとアメリカの外交政策」(ジョン・ミヤシャイマー他著・講談社)
- 「中東・北アフリカ年鑑75～76年」(中東調査会刊)
- 「イスラエルとは何か」(ヤコブM・ラブキン著・平凡社)
- 「イスラーム国」(アブドルバーリ・アトワーン著・集英社)

後記

4月4日に、重信さんが4回目の抗癌手術を受けられました。危険がまったく予測されなかったわけではありましたが、率先して手術に向かい、結果として滞りなかったようで、本当によかったです。しばらくしたら、また癌の子供が顔をのぞかせるのかもしれませんが、早めに処置するようにして徐々に完全に克服できると思っています。彼女が健康に出獄できる日を待ちながら。(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階
救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

「正誤」表

第134号

- ①2P(本文)11行目 兵士行為→兵士の行為
- ②2P下から6行目 特別管理地域→特別国際管理地域
- ③4P(短歌)3行目 ニュ*ス→ニュース
- ④6P(2/17)8行目 南朝→難聴
- ⑤6P右上から7行目 空漠の年→空爆の年
- ⑥6P右上から11行目 香子花→香る花
- ⑦6P(2/25)右下から6行～5行目 「励まされた」3月→「励まされた」昨年3月
- ⑧6P(2/28)右下から9行～8行目 単独インタビューが→単独インタビューが
- ⑨8P(3/11)左 3行目 OS-110カロリー→OS-1の10カロリー
- ⑩9P(3/17)左 8行目 ねげし→のげし
- ⑪10P左下から7行目 医務部長となる
→医務部長と一緒にモニターでチェックしておられた人が執刀医となる(挿入)
- ⑫10P右上から2行～3行目 大20～25cm→大腸20～25cm
- ⑬11P(3/30)左下から12行目 わかって分かって→分かって(削除)
- ⑭12P(4/4)右下から4行目 血中酸素チェック→血中酸素と心拍チェック
- ⑮12P(4/5)右下から4行目 血中酸素チェック→血中酸素と心拍チェック
- ⑯16P(4/28)右16行目 細かい金属→細い金属
- ⑰17P(4/30)右上から7行目 回復力→回復力
- ⑱19P(中東2016年)左2行～3行目 1918年10月30日→9月30日
- ⑲19P右下から19行目 ハーバード・サミュエル→ハーバート・サミュエル
- ⑳20P左22行目 1909年に→1909年の
- (21)20P右6行目 民族解決闘争→民族解放闘争
- (22)24P(後記)囲み1行目 抗癌手術→癌手術